

# 日本科学哲学会第 37 回大会

## シンポジウム資料

松阪陽一

このシンポジウムの主役はフレーゲなのですが、私がお話したいのはフレーゲとラッセルとの関係についてです。フレーゲによる意義(Sinn)と意味(Bedeutung)の区別、ラッセルによる記述の理論が発表されてからおよそ一世紀が経つわけですが、彼らのどちらにより根本的な洞察を認めるのかは、現代の言語哲学者にとっても未だに大きな問題であると言えます。特に、文の意味や命題的態度の対象を探究する際に、フレーゲの思想(Gedanke)を出発点にするのか、あるいはラッセルの単称命題(singular proposition)をモデルにとるのかは、ある種の意味論研究での方法論上の分水嶺になっています。シンポジウムではこのふたつの違い、つまりフレーゲの思想とラッセルの単称命題の違いについて、最近考えていることを少しお話ししてみたいと考えています。